
魔法神姫リリカルなのは

なるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法神姫リリカルなのは

【Nコード】

N3950K

【作者名】

なるち

【あらすじ】

ジェイル・スカリエツィ事件終結から半年、機動六課は当初の予定通り解散するはずだった。

だが解散は急遽取り消され、正式運用が決まった。

そんな中、六課へ1人の騎士が出向してくることで物語りは動き出す。

オリキャラのイラストをfcブログに投稿しました。良ければご覧下さい。

イラストを更新した場合は活動報告にて報告を行います。

http://lirycal01.blogspot49.fc2.co
m/blog-entry-1.html

登場人物・デバイス（前書き）

オリジナルキャラのプロフィールなど乗せておきます。

物語が進むに連れて内容に変化が出ると思います。

下記のFCブログにオリジナルのイラストを載せていこうと思います。

イラストといってもカラーラフですが。

<http://liryca101.blogspot49.fc2.com/blog-entry-1.html>

登場人物・デバイス

カオン・ヒメガミ

(イメージCV：川澄綾子さん)

出身：ミッドチルダ中央区画

所属：時空管理局 本局航空武装隊（機動六課に出向中）

階級：准将

役職：総隊長

魔法術式：近代ベルカ式・空戦SS+

魔力変換資質：凍結

この小説のオリジナル主人公で、18歳。身長165cm。

年上であるのはたちに敬語を使わないのは親しい間柄であると言
うだけではなく、彼女の性格にもよるようである。

実家はミッドチルダや管理局では有名で、代々エリートを輩出して
きた名門・ヒメガミ家。

名門であるだけあって、お金持ちの家であり管理局にも出資してい
る。

そのためヒメガミ家は管理局に対しても影響力を持っている。現在
の地位（総隊長）には自力で上り詰めるほどの高い能力を持つ。

その異常ともいえるほどの高い能力の裏には秘密があるらしい・・・
幼少時は家の敷地から出ることすら許されず、英才教育を受けてき
た。高町なのはが初めての友達。

なのはら友達の前では年相応で穏やかだが、彼女等が居ない場所
では冷めた雰囲気を出す。

敵を前にすれば冷酷になり、目的のためならば手段を選ばない一面も見せる。
ただし、それは友達であるのならには決して見せない。
神速の居合いを得意としている。

デバイス：ムラクモ

総てが純白に染まった日本刀型のデバイス。刃渡りから太刀に分類される。
途轍もなく優れた切れ味と強度を持つ。

技・魔法

絶凍氷神閃

神速の居合いによる攻撃。攻撃範囲は狭い。近距離用。

絶凍氷刃閃

上記の攻撃に魔力を凍結変換した冷気を纏わせて行う。冷気が砲撃のように放たれる。敵を切裂いた場合は正面に発射、受け止められ
た場合はそこから発射される。その射程は短い。魔力消費大。

絶凍連刃閃

超神速から放たれる連続した絶凍氷神閃。総合的なダメージは絶凍
氷神閃を上回るが、一撃の威力では劣る。

神足

高速移動魔法。フェイトと言うソニックムーブ。大抵この高速移動
魔法から攻撃へ繋げる。

神足 絶凍氷神閃がカオンが好んでよく使う組み合わせ。

神陣

空中に見えない足場を作る魔法。これにより空中でも踏ん張りが利き、強烈な居合いを繰り出すことが出来る。

あの方

(イメージCV：川澄綾子さん)

出身：????

所属：????

魔法術式：近代ベルカ式

魔力変換資質：凍結

ミュヤヤヨイ、サイトたちから『あの方』と呼ばれている人。詳細は一切不明。

ただ、声色からして若い女性・・・、なのかもしれない。

サイトたちが第7隔離世界にてカグツチとの戦闘中に現れた。

容姿はカオン・ヒメガミと全く同じ。バリアジャケットの色が異なっているが、カオンと同一人物なのかどうかは不明である。

デバイス：????

技・魔法

凍る世界

発動地点を中心に広範囲を瞬時に凍結させる。彼女の技量と凍結変換能力、膨大な魔力があつて初めて可能となる。

「凍てつけ、凍る世界」

終わる世界

凍る世界にて凍結させた対象を破砕する魔法。
「砕けよ、終わる世界」

ミユ・カンザキ

(イメージC.V:小清水亜美さん)

出身:ミッドチルダ

所属:???

魔法術式:近代ベルカ式・空戦S+

魔力変換資質:炎熱

六課を襲撃した人物。18歳。身長173cm

紅のポニーテールで鋭い目つき。普段は赤いレザージャケットに赤いジーンズと言う格好をしている。

普段は丁寧な口調で、倒置法で話す。だが生来短気なため、すぐに粗暴な口調になってしまう。

かつてはミッドチルダにあった名家「カンザキ家」の長女。いわれの無い罪を着せられて追放された。

故に管理局を恨んでいる。

デバイス:アオエ

2m近い長さを誇る日本刀型アームデバイス。

技・魔法

隼落とし

アオエを用いた高速の居合い。カオンの居合いには速度で劣るが威力では優っている。

ヤヨイ・クロハネ

(イメージC.V: 田中理恵さん)

出身: ????

所属: ????

魔法術式: 近代ベルカ式

魔力変換資質: 無し

黒のロングヘアーで釣り目の美少女。15歳。162cm。

普段は黒一色のセーラー服を着ている。重度のブラコンで、兄のサイトを「お兄様」と呼んでお嬢様口調で話すのが特徴。

高慢な性格で、魔法を扱う事の出来ない人間を「カス」呼ばわりしている。また自分本位で執念深い面が有り、報復のためならば部下を平然と使い捨てる。

デバイス: トンボキリ

先端の刃が三日月の様な形状をしている槍型アームデバイス。敵を殺す事を好む凶悪な男性の人格で、主を呼び捨てる。

技・魔法

闇演舞・槍時雨

トンボキリを真上に向けた直後に無数の槍型の魔力弾が自分を中心とした周囲に降り注ぐ技。効果範囲は広いが敵味方お構い無しなので使いどころが難しい。

闇演舞・不如帰

トンボキリの刃に圧縮した魔力を纏わせて殺傷力を増した後、目にも留まらぬスピードで乱れ突きを浴びせる技。本人の気分しだいで1撃のみの場合も有る。

サイト・クロハネ

(イメージCV：福山潤さん)

出身：?????

所属：?????

魔法術式：?????

魔力変換資質：?????

希少技能：?????

ヤヨイの兄。19歳。185cm。端正な顔をした美青年。

妹のヤヨイを大切に思っている。「あの方」が不在時は他の7人を纏めるように任されている。

カグツチが放った超高密度の火炎魔力弾を完全に掻き消していたが……?

ナオ・プリウス

(イメージCV：喜多村英梨さん)

出身：?????

所属：?????

魔法術式：近代ベルカ式

魔力変換資質：????

「結局」 「っしょ」というのが口癖。年齢は15くらい。身長155前後。

ライトブラウンのセミロングに翠の瞳で、猫の様な印象を与える少女。普段は白い骨格の様な模様の入った黒いシャツとを着ている。結構面倒臭がり屋。

デバイス：オニツメ

先端から魔力刃やら魔力糸やらを作りだす事が可能。長さなどはある程度調整できる。

技・魔法

彩殺り演目・暗殺神刃アサシンドガー

魔力によって作り出したオニツメを模した鉤爪（大きさは調整可能：最大で身長約二倍）が手の甲を覆うように出現し、それで敵を斬り裂く。

彩殺り演目・賽の舞

オニツメの先端から何本もの魔力糸を創りだし、相手を絡めて細かく切断する。切れ味抜群。

第零話 「新たな物語」

ジェイル・スカリエツィ事件（通称JS事件）は、主に地上部隊の局員が一丸となつて戦つたことにより幕を閉じた。その中で一番の功績をあげていたのが、新人や若手ばかりで構成された部隊・機動六課だった。

だが機動六課はあくまで試験的に設立・運用された部隊であり、当初から機動六課の運用期間は1年間と決まっており、三月を持って解散する予定だった。しかしその予定は急遽変更され、六課は本局所属の正式な部隊としてミッド地上に発足することとなった。そして正式に発足するといっても、殆どの隊員はすでに復隊・転属が決まっていたためにもう一度部隊員を集めなおさなければならなかった。

そんな中、エース・オブ・エースの異名で知られる高町なのは一等空尉には、本局航空武装隊よりもう一年、六課に命令に近い残留の要請が来ていたため残留することになった。しかし、その時点で前線に出て戦える魔導師がなのはだけという事態に陥っていたため、救済措置なのか本局航空武装隊から一名の騎士が出向してくることが伝えられていた。

どうして突然予定が変わつたのか、それは時間を少し遡ることに

なる。

六課が解散を迎える三月になる少し前。

ミッドチルダ北部にある聖王教会 教会騎士団 騎士カリム・グラシアは、自身が持つレアスキル・プロフェーティン・シユリフテン預言者の著書で新たなページの作成・解読を行っていた。

教会や管理局に関わる「事件」の預言が多く現れるため、教会や管理局からの信頼度は高かった。

そして新たなページの解読を進めて行くうちに、再びロストログアが関わってくるかもしれないことが分かったために、すぐに管理局に報告していた。

管理局も先のJSもこの預言に現れていたこともあり、以前よりもさらにカリムの予言を重要視するようになった。

そして、その対応策を講じた結果が六課の正式運用の決定だった。

JS事件のような大きな事件からさほど時も置かず、新たな物語は動き出す。そして六課に出向してくる騎士とは。

魔法神姫まほうしんまきリリカルなのは 始まります。

第零話 「新たな物語」(後書き)

やっちまったあ〜!!

白き円卓の騎士がちょっと疲れたのでウサ晴らしに書いてしまった！
こっちのほうの更新は多分遅めです。円卓があるので・・・

あと、こっちはs t sのキャラの内、出ない人もいます。
ストーリーの都合上、女主人公はかなり強いです。

どうして女オリ主なのかって？

それはあれですよ、作者が見る限り男オリ主ばっかなので
女オリ主がいてもいいじゃないか!! って思いました。

なので微妙に百合要素があったりして・・・

第壹話 「美人の総隊長」 (前書き)

ようやくスタートしました。

あくまでメインの白き円卓の合間に書いてるので更新は遅めです。

オリキャラ、オリ設定などあるのでお嫌いな方はお戻りください。
それではどうぞ。

第壹話 「美人の総隊長」

その日、機動六課はついに解散の日を迎え打ち上げパーティーを行っていた。

正確には解散ではなく、六課を去っていくメンバーたちの送別会のようなものだが。

残留するメンバーははやてやなのはなど、ごく一部のメンバーだけだった。

スバル達フォワードメンバーは部隊長挨拶が終わったあと、打ち上げ会場に向かうため廊下を歩いていった。

「あ、みんなちよどいいところに居た」

「なのはさん、どうしたんですか？」

「このあとパーティーの前にちよっと集合ね」

「あ、はい」

「デバイス持ってきてね。それじゃ」

そう言い残してなのはは行ってしまふ。残されたフォワード達はいまいち状況が飲み込めなかったが、とにかく言われたとおりデバイスを持って集合場所へ向かうのだった。

「おう、来たな」

集合場所でフォワード達を待っていたのは隊長副隊長達とギンガだった。

「お前らデバイスは持って来てんな。そんじゃ始めつか」

「あの、始めるって何をですか？」

本局航空武装隊の制服を着ているようで、おそらく局の魔導師なのだろうが。

「面白そうなことやってるわね。挨拶ついでに」

そう言つとその女性は模擬戦の現場へと向かうのだった。

「お疲れ様」

模擬戦がなのはたち隊長陣の勝利で幕を閉じたときにそんな声が聞こえてくる。

模擬戦に参加していない人物の中でそんなことを言う人物は、この場にははやくかギンガくらいしか居ない。

だが今さっき聞こえた声はその2人のどちらでもない。

一同は声のしたほうへと顔を向ける。そのタイミングは面白いくらい同じだった。

「カオンちゃん!？」

「久しぶりね、なのは」

「ホント久しぶりだね」

「あの、なのは・・・ヒメガミ准将と知り合いなの？」

「あ、うん。前にちよつとね」

現れた人物となのはは面識があるようで、ファーストネームで呼び合っている辺りそれなりに仲が良いことが伺える。

その間、フォワード達はなにやらヒソヒソ話していた。

「ヒメガミ准将、今日はまたどうしてこちらに？」

「今日は挨拶に来たのよ」

「挨拶・・・ですか？」

「六課正式運用にあたって本局航空隊から一名出向ってことになつたでしょう？その挨拶よ」

「あ、あれですか。でもわざわざ准将が自らお見えにならなくても、出向してくる本人が来たら良かったんと違います？」

「それはそうだよ。それにしても前線メンバーが私とその人の2人だけってどうかと思うけど・・・」

「あな」

「あの！」

カオンが何かを言いかけたとき、ティアナがそれに被るように声を上げた。

「六課って今日で解散のはずじゃありませんでした？」

「あ、そうか。フォワードの皆はまだ知らんのやったな。色々あつてな明日から正式運用が決まったんよ」

「・・・そうなんですか！？」

「うん。みんなの進みたい道の邪魔にならんように黙っとつたんよ」

「六課所属で前線に出られる魔導師が実質私だけになちゃって、本局から貸し出し扱いで1人来ることになってるの」

フォワードに知らせなかったのは、はやてなりにフォワード達の事を考えてのことだったようだ。

「でもその出向してくる人ってすごい人なんです。わざわざヒメガミ准将が挨拶に来るなんて」

「ですよ、一体どんな人が来るんですか？」

「あ、それは」

フォワード達は興味津々な様子で、ヒメガミ准将という上官の前だということを忘れているかのようだった。

「私よ」

「そうそう、カオンちゃん・・・って、え！？」

「ヒ、ヒメガミ准将・・・あの、そんな冗談は」

「冗談じゃないわ。私が本局航空武装隊から出向してきた騎士よ」
それを聞いた瞬間、その場にいる全員がフリーズする。

あのカオン・ヒメミヤ准将が六課に出向してくるといふのだ、フリーズするのも仕方なかった。

「ほんま・・・なんですか？」

「ええ」

「まさか、本局航空武装隊 総隊長が出向してくるなんて・・・」
「なのはたちですら驚いているのだ、フォワードに至っては「何故？」という疑問だけが残り、もう言葉は出なかった。」

そんな中、ティアナだけは思考が働いていた。

「あのヒメガミ准将、私はティアナ・ランスター二等陸士であります。失礼とは承知でお願いがあります」

「何かしら？」

「あの、私たちフォワードと模擬戦してもらえませんか？」

「ティ、ティア！？そんなの失礼だよ！私たちなんかが・・・」

「いいわ、やりましょう」

ティアナの大胆な発言に、戻ってきたスバルは慌てて止めるが、あっさりと快諾されてしまった。

それにはなのはたちも驚いていた。本来ならスバルが言い出しそうなことを、ティアナが言い出したからだ。

そして何より、断ると思っていたはずの模擬戦を引き受けてしまったことを。

「あ・・・ありがとうございます！」

「ただし、条件があるわ」

「条件・・・ですか。何でしょう？」

「私とあなた、一対一でやること。それが条件よ」

「え・・・はい！やります！」

「カ、カオンちゃ」

止めようとするのは手を挙げて静止させ、準備に取り掛かる、とはいっても、カオンは少し場所を移動しただけでデバイスもバリアジャケットも出していなかった。

「あの、デバイスとバリアジャケットは・・・」

「いらないわ」

はつきりと言われたティアナは少々ムツとするが、それだけ自信があるのだろうと思うのだった。

（まさか受けてもらえるとは思わなかった。でもこれで分かる。航

空隊のトップにいる人の力量が)

「始めましようか、なのはお願い」

「うん・・・レディー、ゴー!」

なのはが合図を出した次の瞬間、ティアナの視界は真っ暗になる。
(何!?意識はある・・・頭を何かが掴んでる?)

視界が真っ暗になったのはほんの2〜3秒で、すぐに光が戻ってくる。ティアナに見えたのは自分の顔から離れていくカオンの手だった。

「勝負ありね」

「え・・・」

ティアナは何が起こったのか理解出来ずにいた。理解できるのは、自分が圧倒的な差で負けたということだけだった。

呆然と立ち尽くすティアナの元へスバル達が駆け寄ってくる。

それと入れ替わりになるようにカオンはなのはたちの所へ戻っていた。

「ティ、ティア大丈夫!？」

「私、今何されたの？」

「えっと、アイアンクロー（正式名称：ブレインクロー）の要領で掴まれたんですよ」

「痛く無かったですか？」

「ええ、大丈夫・・・」

(完全に遊ばれてた・・・こんなにも差が・・・)

歳もそう変わらない相手に圧倒的实力差を見せ付けられショックを隠しきれなかった。

なのはたちとも大きな実力差はあるものの、今のような負け方をするほどでもない。

上には理不尽なほど高い能力を持った人間もいるのだと実感するのだった。

「私に模擬戦を申し込んだのは、私の実力を見るため・・・ってところかしら？」

「あつ」

いつの間に来たのか、カオンはティアナ目の前にいた。ボーッと考え事をしていて気付かなかったのだろうか。

「あの、出しゃばったことを言つてすみませんでした」

「謝らなくていいわ。それに、私好きよ？あなたみたいな子」

「え？」

「向上心があることはいいことよ。一対一の条件を出したのも、あなただけが模擬戦を申し込んできたからよ」

「ヒメガミ准将・・・」

「強くなりなさい、ティアナ・ランスター」

「はい！ありがとうございます！」

その後、カオンは「挨拶があるから」となのはとはやての三人で部隊長室へ向かっていった。

ちなみにフェイト達は復隊・転属で明日より居なくなるため、来なくてもいいと言われフォワード達と打ち上げパーティーへと戻るのがだった。

機動六課 部隊長室

「改めまして時空管理局本局、航空武装隊・総隊長 カオン・ヒメガミ准将です。明日より六課へ出向となるため挨拶に参りました」

「機動六課・課長兼部隊長の八神はやて二等陸佐です。わざわざ挨拶に来ていただいてありがとうございます」

「航空武装隊からの要請でもう一年六課に出向となりました、高町なのは一等空尉です。よろしく願います」

「さて、堅苦しい挨拶はここまでにしましょう」

「そうしてもらえると助かります」

「でもホントビックリしたよ、カオンちゃんが出向してくるなんて」
先ほどまでの真面目な雰囲気はほんの三十秒ほどしか持たなかつ

た。すぐに部隊長室は和やかな空気に変わるのだった。

「それではやて、聞きたいことあるんでしよう?」

「そんなら聞かせてもらおうわ」

初対面で会ったにも拘らず、すぐに名前で呼び合うようになっていた。この辺は女の子故なのだろうか。なににせよいいことである。「聞きたいのは、六課が急に正式運用に至った理由や。表向きは」S事件の功績の評価ってことになってるけど、ほんまの理由はそれや無いと思ってる」

「さすがは奇跡の部隊の指揮官ね。その通り本当の理由は、騎士カリムの新たな予言に対する対応策を講じた結果よ」

「カリムの!？」

「どんな予言なの?」

「古き結晶より生まれし三つの力と黒き力が集うとき、彼の者には如何なる力も届くことはなく、総ては彼の者の手に落ちる。これが騎士カリムの預言書に出たものよ」

二人にはその中に聞き覚えのある単語が合った。「古き結晶」と言う単語だ。

「S事件のときにも出てきており、ロストロギア・レリックを指していた単語だった。」

「その古き結晶って、もしかして」

「ロストロギアと違うやろか?」

「そうでしょうね。そして、本局の上層部はそのロストロギアを三種の神器と断定し、私を六課へと出向させたのよ」

「三種の神器?そんなの聞いたこと無いけど」

「詳しいことは私も知らないけど、とにかく危険なものだそうよ」

「仮にそうやとしたら、前線メンバーが二人だけって本局は何を考えてるんや」

「だからリミッターの制限はないでしょう?」

「そうやけど、人手がたらへん。そればかりはいくら優秀な魔導師が二人いてもカバーできひん」

「さすがにずっとこのままってことは無いでしょう。そのうちきつと増員してくれるわよ」

「・・・だといいけどね」

先のこと気が気でない二人はため息まで付いて落ち込んでいた。だがカオンは心配などしていないのか、優雅にお茶を飲んでいるのだった。

「さ、打ち上げパーティーに戻ったら？」

「そうさせてもらうわ」

「カオンちゃんも来る？」

「私は遠慮して置くわ。用もあるし」

「そっか、じゃあまた明日ね」

「ええ」

二人と別れたカオンは一度地上本部へ戻るために廊下を歩いていた。

「お姉様、私は・・・」

そうポツリと呟いたカオンの表情は先ほどまでとは違い、悲しみの色が浮かんでいた。

第壹話 「美人の総隊長」 (後書き)

六課に残るのがなのははやてだけってW
相変わらず問題ありすぎな部隊ですね・・・

生暖かい目で見守ってやってください。

第貳話 「炎熱と氷結」 (前書き)

お久しぶりです!!

ようやくこつちを更新できました。

人物・デバイスの紹介ページですが、基本的に最新話が投稿されるたびに更新されると思ってください。

正確には最新話の投稿前に更新してますがw

これからは出来る限りこちらも早く更新したいと思います。
書いてて結構楽しくなってきました。

第貳話 「炎熱と氷結」

其処は薄暗く、到底人が暮らしているような場所ではなかった。しかしそんな場所に彼等は居た。勿論、薄暗いために顔を確認したりすることは出来なかったが。

だがそんな中でも分かることがあった。一つ目は九つの塔の様な物が建っているということ。

九つの内の八つが円を描くように等間隔で並んでおり、残りの一つが中央に聳え立っている。

そしてその各塔の上に一人ずつが立っていた。しかし中央の一人だけは椅子と思われる物に座っていた。

二つ目は周囲に壁などが全く見当たらない事から、この場所がかなり広いということ。

三つ目は地面が見えないこと。下を見下ろしても靄が掛かった様になっており、地面があるのか無いのかさえ判断することが出来ない。

「それで誰が行ってくれるのかしら？」

「行ってきましょう、私が」

中央の塔に立つ人物が発した言葉に、円を描く様に立っている8つの塔に立っている人物の内の一人在一歩踏み出してそう返した。声の感じからして両者共に女性であることが伺えた。

「そう、あなたが行ってくれるのね。分かっているとは思うけど、ターゲットは殺さずに連れてくるのよ？」

「粗暴なおサルさんには無理に決まっていますわ」

「何だと！？もう一遍言ってみる！」

「ほおら怒った、お下品です事。この任務は私わたくしがお兄様にしか出来

「ません事よ」

「ああ？お兄様に守ってもらわなきゃ何にも出来ねえ奴が」

「・・・やめなさい」

お嬢様口調の女性が横槍を入れると、そのまま二人は口論へと突入してしまふ。

中央に立つ女性がやめるように言葉をかけるがまるで聞こえていないのか、口論が止む様子は無い。

痺れを切らしたのか、中央の女性が立ち上がって数歩前へと移動する。

「やめなさい！」

「わ、悪い」

「も、申し訳御座いませんわ」

大声で怒鳴った彼女からは、一般人ならば一瞬で気絶してしまいうようなほど強い威圧感プレッシャーが放たれていた。

それに気付いた二人は冷や汗を流し、無意識の内に一步後ずさつていた。

「あなたに任せるわよ。負傷させるのはいいけれど、五体満足の状態で連れてくるのよ？マテリアルの回収も忘れずに、ね？」

「は、はい。お任せ下さい、この私に」

その女性は冷静さを取り戻したのか、話し方が最初のように丁寧な口調での倒置法に戻っていた。

時空管理局本局に籍を置き、ミッドチルダ地上に部隊を展開する機動六課。その六課の部隊長室でカオンとリインは優雅に午後のティータイムを取っていた。やはりお嬢様だけあって、気品が漂っている。リインは必死にカオンのように上品に飲もうとマネをしていた。

そんな彼女等を前に、この部屋の主

八神はやては自身のデ

スुकに着いていた。

頭は俯き気味になっており、その肩はプルプル震えていた。それを見たカオンは「寒いのかしら？」なんて思っていたが、本日は雲も殆ど無く晴天な上、もう五月なのだ。さすがにそれは無いだろう。

「・・・なんでや？」

「え？何か言ったかしら？」

はやての呟きを上手く聞き取れなかったカオンは、これまた上品にカップをテーブルへと置く。

リインは上品に飲むことに必死なのか、はやての呟きに全く気付いていなかった。

「私が、私がデスクワークしとんのに・・・なんで二人はお茶飲んでるんや!？」

「何でって、もうデスクワークが終わったからよ？」

「リインは!?!リインは私と同じくらいあつたよな!?!」

はやては何と言うか、もう本当に必死だった。言うまでも無い事だが、仕事を頑張ることに必死という意味ではない。

要するに自分も優雅にティータイムと洒落込みたいのだ。

「私はカオンさんが手伝ってくれたですよ」

「な、なら私も」

「自分でやりなさい」

「そんなあゝ・・・」

本気で頂垂れだすはやて。こんなのが部隊長で大丈夫なのかとさえ思えてくる。

そんな彼女に救いの手が

「リインが手伝いましょうか？」

「ほんまか!?!ありが」

「駄目よ、リイン。あなたがそんなだからはやてがこんなになるのよ」

「だ、そうです。頑張ってくださいね、はやてちゃん」

「カオンの鬼!悪魔!」

差し出されなかった。

カオンを鬼だの悪魔だの罵るが、まるで聞こえていないのか再び優雅に紅茶を飲んでいた。

この状況に於いて、なのは居ないことがはやてにとってとても幸運なことだった。

何故ならば、なのはカオンを大変慕っているのである。その理由については後に機会があれば語ることにしよう。

とにかく、もしなのはがここに居たとしたら、おそらく白い魔王が降臨していたに違いない。

紅茶も飲み終わり、はやてのデスクワークを仕方なく手伝う為にカオンが立ち上がるうとしたまさにその時、隊舎内にけたたましいアラート音が鳴り響く。

『八神部隊長！』

「どないした！？」

『隊舎付近に魔力反応を感知しました！それもかなりの数です！』

「なんやて！？一体何が　ってカオン！」

バックヤードスタッフの報告を聞いたカオンは、はやての出撃命令を聞く事無く部屋を出て行った。

「ああもつ！すぐそっち行く！なの　高町一尉にも出撃命令出して」

『了解です』

（まさかカリムの予言に出たやつがもう始まるうとしてるんか？カオンに聞いてからまだ一週間やのに、速すぎる。まだろくに六課再編も出来てへんのに）

部隊長として色々思うところはあるが、とにかく今出来ることをするしかない。はやては六課の司令部へ全力疾走するのだった。

六課の隊舎を出て、少しばかり移動した場所にそれら異形は居た。

人の形をしてはいるが、それだけだ。瞳は縦長に、歯は犬歯の辺りがキバのように伸び、舌は細長く、長い尻尾があった。

そして極めつけは肌の色、そしてその表面だ。人間には決してありえないような状態をしている。

肌の色は薄いグレーで、表面はまるで蛇の鱗の様になっていた。

(もしかして三種の神器と関係あるのかしら?)

「キシヤー！」

「シャー！」

「どうやら人間の言葉は話せないようね。なら用は無いわ。抜刀、ムラクモ！」

カオンが首から提げていたアクセサリが、声に反応して一瞬にしてその形状を変える。

白い鞘、白い柄、白い鍔と総てが純白に染まった日本刀の形状をしており、刃長からして太刀に分類されるだろう。

彼女自身もまた、純白のバリアジャケットを装備している。それはまるで、第97管理外世界にある極東の島国の巫女装束を模したような姿だった。

そして鞘からゆっくりとムラクモを抜き放つ。その刀身も純白で、太陽の光を反射してより一層輝いて見える。

鞘を左腰に差したかと思うと、一瞬で間合いを詰めていた。

「全然手応えが無いわね」

カオンが言うとおり、一瞬で間合いを詰めると同時にムラクモを右へ横薙ぎに振るっており、一匹の異形の首が飛んでいた。

それはあまりに疾く、斬撃から遅れること数秒の後に切り口から濃い青をした鮮血が吹き出る。

「どうしたのかしら？」

カオンの圧倒的な強さ、そして途轍もない殺気に気圧されたのか、異形の者達は本能で恐怖を感じて竦んでいる。

カオンが一步、また一步と踏み出すと、それに合わせて異形達も一步、また一步と後ずさっていく。

「これ以上は何も出そうに無いわね」

「ギジャー!？」

これ以上何も情報を引き出せそうに無い、そう感じ取ったカオンはさっさと倒してしまおうか、それとも後から来るのはに任せてしまおうかと思案していた。

だがそれは異形の叫び声とも言える声によって中断された。

何があつたのかと、そちらを見ていると異形達が2つに割れて道が出来上がった。

その道をカオンのほうへ向かって歩いてくる人物が居た。

赤い髪をポニーテールにし、鋭い目つきをしており、侍を思わせる腕の甲冑、ワンピース型のバリアジャケットを装備した女性だった。

その人物は比較的身長の高い165cmあるカオンよりも高く、間違いなく170cmは超えているだろう。

そしてその女性は左手に2m近くはあるだろうかという、大太刀に分類される日本刀型のアームドバイスを持っていた。

「何を脅えているんですか、あなた達。役目を果たしなさい」

その女性が異形たちに何やら命令のようなものを出しているが、脅えてしまった彼等は一向に動こうとしない。

そんな様子に女性の表情は険しくなっていく。

「ちっ、早く行けって言っただろが!バカ共!」

「ギ、ギジャー」

女性が突然怒鳴り声を上げた。だがその声によって竦んでいた異形達はカオンへと刀を向けて襲い掛かる。

しかしその刃がカオンへと届くことは無かった。突如として飛来した何発もの桜色の球体が異形たちを吹き飛ばしたからだ。

「カオンちゃん!」

「遅いわよ、なのは」

「ゴメンゴメン」

「雑魚は任せるわ」

「え？ちよ、ちよつと！」

言い終わるなりカオンはいきなり例の女性へと斬り掛かった。

まずは小手調べとでも言わんばかりに加減して斬りつけたのもあるだろうが、その女性は鞘に収納したままの大太刀でいともたやすく片手で受け止めた。

「一体何が目的なのかしら？」

「教えてあげますよ、私に勝つことが出来れば」

「そう、分かりやすくいいわ」

女性がムラクモを弾き返したことによって両者の間には距離が作られた。

そしてようやく鞘から大太刀を抜く。鞘は収納したのが、直ぐに消えてしまった。

「まだしていませんでしたね、自己紹介を。私はミュ・カンザキ、アームドデバイスのアオエです」

「今カンザキと言ったわね？あのカンザキかしら？」

「さて、どうでしょうか」

「私は」

「カオン・ヒメガミ、知っています」

「そう、なら逮捕して知っていることを洗い浚い吐いて貰いましょうか」

互いに一瞬で距離を詰めるとカオンは袈裟切りの要領で、ミュは横薙ぎに斬撃を繰り出す。

刃同士が激しくぶつかり、行き場をなくした力が地を衝撃となつて駆ける。体格や武器の重量等の差から、正面からぶつかれば明らかにカオンが不利だろう。

そして、やはり体格や重量がある分ミュの斬撃のほうが威力が高かった。ミュがアオエを振り切る。それを抑えきれず、カオンは横へ大きく吹き飛ばされた。

「仕方ないわね」

「どういふつもりです？」

ミュは少々気分を害していた。何故なら、戦っている最中にも関わらずカオンがムラクモを鞘へと納刀したからだ。

先の一撃で勝ちを諦めたのだろうか、そう一瞬考えたが放っている殺気がそうではない事を告げていた。

となれば、舐められているとしか考えられなかった。

「よそ見していると死ぬわよ」

「何を」

「何を言ってるんですか、あなたは」そう口を開きかけた瞬間、カオンの姿を見失った。

カオンは既にミュの目の前まで距離を詰めていた。そして前後に足を開き、体勢を低くしていた。

「絶凍……氷神閃」

ミュに神速の居合いが叩き込まれる。だが視界の端に僅かにカオンを捕らえていたお陰で何とか反応することが出来、アオエで受け止めていた。

しかし先程の斬撃より威力が増していたために、ミュは受け止めきれずに数メートル弾き飛ばされてしまった。

「くっ、やりやが」

（速え！？）

視界へ入れるべくカオンが居た場所へ顔を向けた時、既にカオンはミュの上へと回り込んでいた。

そして先程のように居合いの体勢へと入っていた。しかもその体勢というのが、上下逆さまになっている。よくもまあそんな体勢から居合いに入れるものだ。

「空中でも出来んのかよ！？」

「絶凍……氷刃閃」

再びムラクモが神速の速さで上から叩きつけられる。だが先程の一撃とは違い、刀身が冷気を纏っていた。

避けられる状況ではないためアオエで受け止めるしかなかった。

しかし受け止めると同時に、冷気が砲撃魔法のようにミュを飲み込

んだ。

冷気が収まるとそこには文字通り氷漬けとなったミュの姿があった。完全に固まっており、どう考えても自力での脱出は不可能だった。

「さてと、なのはの方を手伝いましょうか」

まだ戦っているなのはの救援に向かうべく、背を向けて歩き出す。カオンが数歩、歩を進めたとき背後で何かが燃えるような音が聞こえた。

「これは!？」

カオンの視界には氷が巨大な炎に包まれている様子が映っていた。どうして炎が発生しているのか、その答えを瞬時にカオンは導き出した。

「よくもやってくれたな」

炎が収まるとミュは鬼のような形相でカオンを睨みつけている。いきなり相性の悪い相手と戦う羽目になっているこの状況にカオンはため息を付いていた。

「炎熱変換の持ち主だったのね・・・とことん相性悪いわね、私達」

「テメエの氷結は私の炎熱の前じゃ役に立たねえよ」

氷結では炎熱に勝てない、相手の出方を警戒しつつもどうすべきか思索していると、突然ミュの元に通信モニターが現れた。

「今戦つてんだよ!邪魔すんな! 何だと!?!ちっ、分かったよ」

話は纏まったようで通信モニターは閉じられた。するとミュはアオエを待機モードへと戻してしまい、鬼のようだった形相も元の表情へと戻っていた。

「どういうつもりかしら?」

「終わりだそうです、今日は。また会いましょう、近い内に。では「待ちなさい!」

カオンの静止は意味を成さず、ミュは飛び去っていった。しばらくミュが飛び去った方向を見つめていたカオンだが、なのはの元へ

救援に向かった。

しかし其処には既に異形の姿は無く、なのはが丁度地に降り立ったところだった。

「雑魚は？」

「何か砂になっちゃったんだけど・・・」

なのはが言うように周囲には、先程までは異形の者だったと思われる砂が散乱していた。ミュや異形達が何故此处を襲撃してきたのか、それは結局聞き出すことが出来なかった。

ついに新たな事件は動き出した。これが後にカオンを中心に事態は大きくなっていくのだが、彼女達、いや管理局の総ての人間が知る由も無かった。

第貳話 「炎熱と氷結」(後書き)

さて、遂に募集していましたがオリキャラが登場しました。
多少能力の変更などさせていただきましたが・・・w

引き続きオリキャラの募集をさせていただきます。

名前 出来れば日本人っぽいカッコイイ&可愛い名前で(ただし女
オリ主のようにカタカナ表記)

性別・性格・年齢・デバイス・体格 e t c . . . キャラの特徴
後、使用する技名や魔法名も2、3個考えていただけると助かりま
す。

注) 敵側の幹部的な位置づけとして出す点に留意。

基本的に先着順で採用させていただきますが、設定がおかしかった
りする場合は不採用の可能性もあります。

また、予定よりも多く集まった場合は作者の独断と偏見で選ばせて
いただきます。

言い訳劇場・・・w

こっちの更新が遅いのはちょっと訳がありました。

ストーリーを大まかにしか作ってないので中々文章化できなくて・
・
おまけにオリキャラ出まくるからキャラの管理も難しい・・・

以上、言い訳でした！

感想は作者の動力源になります。書いていただけると嬉しいです。

(酷評の場合、ダメージ受けますがw)

第参話 「追放されし名家」(前書き)

3話の投稿です。もちろん人物紹介のページも更新しました。

あと、これからオリキャラをイメージしやすくするために、カラーラフを描いてFCブログに投稿します。宜しければご覧下さい。

<http://liryca101.blog49.fc2.com/blog-entry-1.html>

イメージを崩したくないという方はご覧にならないようにお願いします。

第参話 「追放されし名家」

ミュ・カンザキと名乗る人物と、その配下だと思われる偉業達の襲撃から1時間程が経過していた。

カオンとなのはは、今回のことについてはやてと詳しい話をするべく部隊長室に居た。

「調べた結果、やっぱりカンザキ家の人間だったわ」

「カンザキ家？」

「知らないの？かつてはミッドチルダでも有数の名家だった家よ？」

「そ、そうなの！？」

「そやけど何でそんな名家の人がこんなことを・・・」

「私の話聞いてなかったの？“かつては”って言ったでしょう？」

カオンは先程、確かに「かつては」と言っていた。その言葉が意味することはやはり一つしか無いだろう。

「何年か前にね、カンザキ家は謂れの無い罪を着せられて追放され

たのよ。管理局によって、ね」

「え……」

「管理局は何でそんな事したんや？」

「当時、カンザキ家は管理局にかなりの資金提供をしていたの。それこそ下手をすれば管理局を乗っ取ることが出来る程のね。其れを恐れた上層部は濡れ衣を着せた、という訳よ」

「でもまさかホントに乗っ取ろうなんてしてなかったんやよね？」

なのはもはやても当時は未だミッドに住んで居なかった為、その辺りの事情には疎かった。

だからもしかしたらカンザキ家が、と考えてしまうのも仕方が無かった。勿論、本心ではそんな事しないだろうと思っではいるのだが。

「当たり前よ。当時のカンザキ家の当主は私から見てもそんな事する人ではなかったわ。いえ、それどころか世界の為に尽力するような人だったわ」

「そんな人だったんだ」

「なら余計に濡れ衣を着せる意味が分からへん。そんなええ人やったら追放する意味なんてあらへんよな？」

「問題なのは人柄がどうかじゃないわ。カンザキ家の影響力が大き過ぎた、其れが問題なのよ。いずれ管理局に反旗を翻すかも知れ

ないってね」

「何それ。そんな理由で追放するなんて許せないよ」

「管理局が此処まで腐ってるとは思わへんだわ」

なのはとはやては、今更ながら知ることとなった管理局の暗部に強い怒りを覚えた。

だが其れを知ったところで今の2人には如何こう出来る事等無かった。仮にこの件について上層部に訴えたりすれば、自分達が罪を着せられるということも目に見えていた。

やはり組織というものは外部から変えられるものではない。内部に居る人間が変わらなければ、何時まで経っても変わらないのだ。その事を改めて認識させられるのだった。

「私もね、可笑しいと思って如何にかしようと思ったのよ。だけど、当時の私はまだ総隊長なんて立場じゃなかったし、そもそもヒメガミ家の当主でも無かったわ。だから私には何も出来なかったわ」

「そつか。あのカオンちゃん」

「何かしら？」

「あの人、ううんあの人がだけじゃなくて、あの異形の集団もカオンちゃんを狙ってたような気がするんだけど・・・そんな感じしなかった？」

「そうね、確かに機動六課というより私を狙っていたという感じだったわね」

「やっぱりカオンちゃんもそう感じたんだ」

「ええ」

確かにあの時、ミユを始め異形達はカオンを狙っている様に見える。其れというのも、六課が狙いならば隊舎へ攻撃してきてもいいはずだ。

だがそのような素振りは一切見せなかったし、彼女たちが陽動だったとしても、隊舎を襲撃する本体の部隊などは居なかったのだ。だからやはりカオンを狙ってきたとしか考えられなかった。

「そやけど何でまたカオンちゃんを狙って来たんやろな。何か心当たりとか在らへん？昔にカンザキ家から恨みを買ったとか」

「無いわよそんなの。大体私は小さい頃はずっと家の敷地から出してもらえなかったのよ？まあ、ヒメガミの家が恨みを買ったって言うのはあるかも知れないけれど。少なくとも私じゃないわね」

「え、今何て・・・」

「だから私じゃないって」

「そうじゃなくて、その前だよ。家から出してもらえなかったって」

「ああ、そっちね。英才教育とでも言えばいいのかしら。ろくに外

にも出させてもらえずに勉強と剣を教えられてきたから・・・だから友達なんて呼べる人間は居なかったわ」

「カオンちゃん・・・で、でも今は違うよね？私達友達だよね？」

「そっやで！」

なのはは本気でカオンを心配している。それはもうとても辛そうな表情を浮かべ、若干涙目になってしまいう程だ。

なのは自身、カオンのことを友達だと思っている。だがカオンにそう思われていないのならば、これほど悲しいことは無かった。

勿論、はやても同じようなことを思っている。

「ええ、私は2人共友達だと思ってるわよ。それにね、あなたは私が初めて友達になれた人なのよ？なのはは」

「え・・・」

カオンは単に事実を述べただけで、何も特別なことを言っただけではなかった。だが其れを聞いたなのはは、頬を赤らめていたという。

九つの塔が聳え立つ薄暗い空間。其処に8つの影があった。どうやら以前中央に居た女性は、今は不在のようだ。

「あくらミュさん、どうしたんですの？あれほど自信たっぷりに出て行かれたのに、コテンパンにやられて帰ってくるなんて」

「ああ！？何だとテメエ、もう一遍言ってみろ！それとな、コテンパンになんかやられてねえ！」

「何度でも言っただけで差し上げますわ。だいたい氷漬けにされるなんて、お間抜けさんですこと」

「テメエ、燃やしてやろうか？ああ！？」

またか、そう言いたくなる様なお約束的な展開である。この2人、見ての通り仲が悪い。

何か事あるごとにこのような口喧嘩になってしまつのである。大抵の場合、お嬢様言葉の少女が煽つてこうなってしまうのだが。

「ああん、怖いですわ〜お兄様あ」

「止めるやヨイ。あまりミュを煽るな」

「はい」

「まあ結局2人ともバカつてことで」

「何ですって！？あのおサルさんとはもかく、私はバカじゃありませんわ！わたくし」

「ああ！？何だとテメエ！」

喧嘩している2人に男性が仲介に入ったお陰で収まりかけていたのだが、この3人とはまた別の女性が横槍を入れたせいで再び勃発してしまう。

「止めろと言っているだろう！」

「も、申し訳在りませんわ」

「止めんなサイト！このままじゃ気が収まらねえ」

「止める、内輪もめをしたところでメリットなど無い。ナオ、お前も余計なことを言つな」

「ゴメンゴメン」

「あの方が不在の今、お前等のことはオレに任されている。面倒な手間を掛けさせるな」

どうやらサイトと呼ばれたこの男性がこの8人のリーダー格のようだ。しかし纏める気が有るのか無いのか、最後の方は面倒臭そうに聞こえた。

「ではこの私がミュさんの失態を拭って来て差し上げますわ」

「テメエじゃ無理だっつーの」

「やってみなければ分かりません事よ。宜しいですか？お兄様」

「ああ、任せる」

「では」

そういい残したヤヨイは不敵な笑みと共にその場から忽然と姿を消した。

ここは陸上警備隊108部隊の隊舎付近。其処を1人の女性が歩いていった。

彼女の名前はギンガ・ナカジマ。階級は陸曹でこの部隊では捜査官という役職に着いている。

そんな彼女が何処へ向かっているのかというと、彼女は捜査官であり魔道士でもある。だから訓練は欠かしておらず、今は隊舎へ戻るその帰り道というわけだ。

その途中でギンガの目に1人の少女が映りこんだ。その少女といのが、長い黒髪に黒一色のセーラー服を着ている。その姿は如何見ても局員には見えなかった。

「君、どうしたの？迷っちゃった？」

「私が迷った？そんな事あるわけ無いですわ」

「えっと、じゃあ此処に何か用なのかな？」

「ええ、此処で暴れれば機動六課が御出でになると思っています」

「え？」

その少女の発言に思考が着いて行かないギンガはフリーズしてしまった。

そして一瞬の間に少女は、黒一色で下半身部分がスカートアーマーになっているボディスーツ型のバリアジャケットへと換装する。

「手始めに死んでいただけですか？」

少女の手にはバリアジャケットと共に起動されていた、刃の先端が三日月のような形状をしている槍型アームデバイスが握られており、ギンガに向かって刺突を行う。

<Defenser.>

突然のことで防御も回避も行えなかったギンガだが、ブリッツキヤリバーの自動詠唱によって助けられた。

バックステップで距離を作り、其れと同時にブリッツキヤリバーを起動させて戦闘態勢へと移行する。

「何なのあなた!？」

「私はヤヨイ・クロハネ。目的は先程申し上げました通りですわ」

「機動六課に一体何の用ですか!」

「あなたには関係ございませんよ。これから死ぬカスにはね」

槍のリーチを生かした刺突がギンガを襲う。素早い突きにギンガは回避することで精一杯で、ろくに反撃する事が出来ずに居た。

『こちらギンガ・ナカジマ。108部隊の隊舎近くで正体不明の魔

導師と交戦中。応援願います！機動六課にも連絡を！」

「あらあら、余計な事しているお暇がありまして？」

「避ける事に専念すればこれくらい私だって」

「ナカジマ陸曹！」

「皆来ちゃ駄目！」

先程まで共に訓練を行っていた魔導師が数名救援に駆けつけた。救援に駆けつけたのは確かにありがたいのだが、彼等の魔導師ランクはギンガよりも低かった。

「あなた達カスも纏めて殺して差し上げますわ。出ていらっしやいクチナワ共！」

ギンガや駆けつけた魔導師達の周囲にいくつもの召喚用の魔方陣が展開され、そこから次々と異形の者達が出現する。人間のことを生物学的に「ヒト」と呼ぶように、どうやらそれら異形は「クチナワ」と呼ぶようだ。

「あなた達のお仕事は簡単。そいつ等が逃げないように取り囲むだけがいいですわ」

「や、止めなさい！あなたの相手は私よ！」

「ええ、あなたには私の相手をしていただかねばなりません。ですがあの雑魚まで相手にするのはいささ面倒ですの。ですから一掃して差し上げますわ。イキますわよ、闇演舞・槍時雨やみえんぶ やりしぐれ」

ヤヨイが槍型のデバイスを手へと掲げる。するとデバイスと同じ形をした魔力弾が周囲一帯に降り注ぐ。誘導などは一切されておらず、所構わず着弾する。勿論クチナワ達に命中しようがお構いなしである。

ギンガは自身を守ることと精一杯で、仲間を守ることが出来ない。その仲間達は次々に降り注ぐ槍型魔力弾によって負傷していく。槍の雨が止んだ時、立っていたのはギンガ1人だけだった。あれだけ居たクチナワ達も全て砂へと変わっている。

「あなた、仲間を何だと思ってるの!？」

「仲間? あんなカスが? あっはははは、笑わせないでいただけます? あんなのはいくらでも替えの利く駒ですわ」

「なっ!？」

そのあまりに酷い一言にギンガはキレた。この戦闘が始まって初めてギンガが攻撃へと転じる。かつて最愛の妹と戦った時に使用したアレを発動させる。

「リボルバーギムレット！」

「その程度の攻撃など」

カス呼ばわりしたのだ、ヤヨイにはギンガの攻撃を避けるなどという選択肢は無かった。バリアを展開して真正面から受け止める。

「はあああああ！」

「所詮カスはカス。この私に攻撃が届くはず

え？」

ヤヨイは一瞬目を疑った。今自分が戦っている人物は如何見ても精々A A +かA A A -ランク程度だ。

対するヤヨイはSランクである。そして+や-が有る無いというのは極めて大きな問題だ。

其れが有るか無いかだけで、同じランクでも大きく力の差が現れるのだ。

故にヤヨイは信じられなかった。如何考えても格下でしかないギンガの攻撃が、自分のバリアに徐々に亀裂を入れていくのだから。

「あああああああ！」

「くっ」

ヤヨイはバリアを突破される前に、バリアに魔力を集中させて爆発させてその衝撃でギンガを吹き飛ばした。

「行ける！」

「もう許しませんわ。カオン・ヒメガミが来るまで遊んで差し上げようと思って居ましたけれど、殺して差し上げますわ。行きますわよ、トンボキリ」

<Ja.>

「不如帰ほしごけず！」

「トライシールド！ きゃあっ!？」

ギンガの正面へと放たれた、魔力を乗せた速くて強力な突き。トライシールドが破壊されたわけではない。攻撃そのものは防ぐことに成功した。だが突きの威力は凄まじく、衝撃まで受け止めるには至らなかった。

吹き飛ばされたギンガは近くにあった隊舎まで一気に吹き飛ばされてしまった。隊舎の壁を吹き飛ばして尚、その勢いは止まらずに中へと吹き飛んだ。

「少しやり過ぎてしまいましたわね。まあ、丁度いい準備運動にはなりましたわ。さて、そろそろカオン・ヒメガミがいらっしやるか

しら？」「

「はあはあ」

壁が吹き飛んだことによって舞っていた粉塵の中からギンガがゆつくりと出てくる。

数箇所からは少量だが出血しており、先の攻撃の威力の凄まじさを物語っている。

「しぶといですわね。いくら手加減してあげたとはいえ、アレを喰らってまだ立ち上がれるなんて」

「はあはあ」

(アレで手加減していたの？この子強い・・・推定オーバーSってところ？)

「かなり息も上がっているみたいですから次で楽にして差し上げますわ」

(駄目、体が言うことを利かない。やられる・・・ゴメンね、スバル)

「不如帰！」

見た目よりもダメージが大きく、満足に体が動かないギンガに向かって再びトンボキリが迫る。

無駄だとは知りつつも、それでもしないよりはマシだとトライシールドを発動させる。

トンボキリがギンガに到達するまで約2秒。ギンガは死を覚悟した。

そんなギンガの脳裏には最愛の妹、スバルの嘆き悲しむ顔が浮かんでいた。

第参話 「追放されし名家」(後書き)

カラーラフ、第一弾はやはり主人公のカオンです。

ちなみに服は、「深夜になのはの服を(勝手に)借りてきたわ」との事(本人談)。

感想などお待ちしております。

では又次回に。

第肆話 「冷酷な目」

ヤヨイが肉迫し、凶刃が突き出される。それを前に、トライシールドを張る以外に何も出来ないギンガは反射的に目を閉じた。殺られる。それ以外の結末は待っていない。どこかにいる冷静な自分がそんな確信めいた思考を弾きだしていた。

直後、『キーン』という何かが弾ける音がギンガの耳に届いた。死の一步手前にいるギンガにとって、それが金属音だということを理解するのは時間を要した。

数秒という時間を要してようやくそれを理解したギンガは痛みが襲ってこない事に気付いた。一瞬、痛みを感じることも無く殺されてしまったのか、あるいは痛みを感じ無いほどのダメージを受けたのかと思った。

しかし、だとすればこんなことを悠長に考えていられるはずは無く、それをすぐに否定した。そして鎖されていた視界に恐る恐る光を取りこんでみれば、そこには。

「大丈夫」

「・・・、え？」

「みたいね」

純白の巫女服に、対照的な黒色をしたブーツであろう靴。長く美しい紺色の髪の毛は夕陽を反射し、本来とはまた違った色味で美しく見える。『美人』と形容するほかに無いその女性が自分の姿を尻目に捕えているのが分かった。

「撤退して治療を受けに行きなさい。ここは私が引き受けるわ」
「で、ですが彼女は危険です！ここは」
「カオン・ヒメガミの名において命じるわ。退がりなさい」
「ヒメ……。っ、ではあなたが！」
「早くしなさい」
「っ、了解！」

ギンガは下がる前に改めてカオンを見た。キメの細かい美しい肌は夕焼けの色を転写したかのように染まり、まるで人間とは思えない程美しく、まるで人形であるかのようにだった。

ギンガが撤退したことを確認すると、カオンは改めてヤヨイへと視線を向ける。

「あの娘は追わないのね」
「暇潰しの相手を追うような真似はしませんわ。先日はおサルさんがお世話になりました」
「おサルさん？ 誰のことかしら？」

もしや、と脳裏には思い当たる人物が浮かぶ。
ミュ・カンザキ。冷静であればそうでもないが、一度激情すると180度性格が変わったように粗暴な言葉使いを始める。
それを指して『おサルさん』と呼んでいるのだろう。だが、敢えて彼女の名を出す事はしなかった。

「あら、あなたの頭も残念なのかしら？ まあいいですわ。ではミユさんのお尻拭いと行きましょうか」
「色々聞きたいこともあるから拘束させてもらっわ」
「出来るのでしたらどうぞ？ さあお前たち、遊んでさしあげなさい」
「っ、さっきわたくしが殺してしまったのでしたわね」

面倒ですわね。そう呟きながらヤヨイはトンボキリを地面に突き立てるようにすると同時に、周囲に幾つもの魔法陣が出現する。

そこからは人型をした、だが決して人では無い異形の存在クチナワが十数体召喚された。

「召喚魔法も使えるのね」

「それとはまた少し違うのですけれど、まあどうでもいいですわね」

さあ行きなさい！ という掛け声が掛かると、クチナワたちはそれぞれが持つ武器 剣やら槍やらを構えてカオンへと襲いかかった。

突撃してくる彼らにカオンも地を強く蹴って向かって行く。最初にカオンへと辿り着いたクチナワが彼女目掛けて剣を振り下ろす。

カオンは剣の太刀筋を見切り、進行方向を少しだけ右へとずらし、ほんの僅かな動作だけで避けると擦れ違いざまにムラクモを振り抜いた。

彼女の速く、華麗な太刀筋は斬った瞬間に胴が離れたりはしない。擦れ違った後、数瞬の時を置いて彼ら特有の青い血が噴き出し、さらに遅れて胴が崩れるように離れていく。

続いてすぐ傍に居るクチナワが槍を突き出してくる。

ムラクモを顔の前に持って来ると、槍の先端に刀身を当てて僅かに軌道を左へとずらした。カオンの左側頭部のすぐ横を槍が走る。だというのに瞬き一つせず、眉をピクリとも動かさず、至って冷静にムラクモで右薙ぎを繰り出す。

2体目のクチナワは首を刎ねられ、同じく青い血を噴出しながら身体を傾かせていく。そして大地に倒れ伏した瞬間、その身体は砂へと変わる。

彼らの身体が砂へと変わることを知っているカオンは特に興味を示さず、今だ迫り来るクチナワたちを見てため息を吐いていた。

「はあ。一体一体相手にするのは面倒ね」

左手に鞘を出現させると、そこにムラクモを静かに納刀した。それを腰に差すと、足を前後に開いて体勢を低くし、居合いの構えを見せる。そして。

「絶凍　　氷神閃」

静かに呟いた直後、クチナワたちの前からカオンは姿を消した。ターゲットを見失ってキョロキョロしている彼らの背後から、遅いわね。そう一言だけ声がした。

瞬間、クチナワたちが身体や首から一斉に青い血を大量に噴出させ、その身体を次々と砂に変えていく。

何が起こったのか。あまりに速かったそれをクチナワたちが知ることは無かった。

この先クチナワが強くなるのかどうかなど知る由もないが、少なくとも今の彼らではカオンの足元にも及ばない。いや、それどころか道端の小石にすらなれていないだろう。

あれだけ斬ってもムラクモには血が一滴として付着していないのだから、その力量の差は歴然としている。

その様子を、ヤヨイは冷めた目でただ見ているだけだった。

(すごい……。あれが話に聞いていた　　)

ギンガが突っ込んだせいでバラバラに吹っ飛んでいる陸士105部隊の隊舎の壁。その影から今の戦闘を見ている者がいた。

青味掛かっている紫の髪に、上が黒で下が白のバリアジャケットを着て、左手にはナックルタイプのデバイスを装備している。はっきり言って、ギンガ・ナカジマである。そう、この壁に穴を空けた張本人だ。もっとも、その原因はヤヨイにあるのだが。

ともかく、カオンに下がって治療を受けるよう指示されたはずなのであるが、それに逆らってギンガはここから戦闘の様子を伺っていた。

ふう……、つと一息吐きながらカオンはムラクモを再度納刀した。鋭い眼光を放つ双眸をゆっくりとヤヨイへと向ける。

射殺してやるそばかりに強烈なそれは、一般人が見れば間違いない威圧感プレッシャーで失神してしまうだろう。しかし、それほどのものを受けても、ヤヨイは意に介していなかった。

「役に立たないカス共　　といたいところですけど、あなたに技を出させただけ良しとしておきますわ」

「その程度で優位に立ったつもりなのかしら？」

「まさか。ですが見ておいても損ではありませんことよ」

「……、そうね」

どうでもいい。心底そう思った。確かに絶凍氷神閃を見せたが、本気では無かった。さらに言うならば、その技はカオンが使用するいくつかの技の中で最も得意とするものだ。

魔力を用い、常識では考えられない程の速度まで剣速を加速させて敵を斬り裂く。言いかえればただ速さだけを追求した居合いというシンプルさ。しかしそれ故に究極的に速い。

だからこそ戦法を変えるつもりは無い。目の前に立ち塞がる敵は己が一番信用している技で確実に仕留める。今までもそうだったし、これからもそうであり続けるのだ。

「あなたと話すより『友達なのはとはやて』と話している方が楽しいわ。だからさっさと終わらせたいのだけれど」

「これは驚きですね。あなた、友達が居たんですのね。少なそうですけれど」

「ええ、二人　　いえ、三人かしら。でも、それで十分よ」

「これですから根暗は」

カオンをバカにしているヤヨイだが、その言葉が最後まで発せられる事は無かった。

ヤヨイの相手をする事に対し、いい加減うんざりしていたカオンがいきなり斬りかかったのだ。納刀している状態からの斬撃だったが絶凍氷神閃ではない。ただ単に抜刀して斬り下ろしただけである。

トンボキリを地面に突き立て、杖代わりに使っていたヤヨイはサツと抜くと、前にかざして容易く防いでみせる。

「人が話している最中に斬りかかってくるなんて、マナーがなっていませんわね」

「さつき言ったでしょう？さつさと終わらせたいと。あなたみたいなバカと話している時間ももつたいないのよ」

「っ・・・」

鏝迫り合いのまま、カオンは冷たい瞳で睨みつけている。それは決して、なのはたちには見せる事がないであろう残忍さが宿っている。

この目は、普段の穏やかなカオンからは想像も出来ないほど冷酷で、殺意すら感じさせる。しかしカオンにとっては何もおかしいことではなく、ただ自分の中に在る一面を見せているに過ぎない。

(あんな目・・・、人がする目なの?)

ギンガがカオンの命令に逆らって隊舎に隠れているのにはちゃんと理由があった。命令に従った撤退したフリをして隠れていれば奇襲を行えるのではないかと考えたからだ。

もちろん命令違反には違いないが、処分を受ける覚悟はしていた。

カオン1人を残して撤退するのはどうしても気が引けた。

既に105部隊から各方面に救援の要請は出ているが、それでもすぐに到着する事は出来ない。まだもうしばらく掛かることを考えると、やはり残っていた方がいいと結論が出たのだった。

罅迫り合いをして、ヤヨイの意識がカオンに向かっている今が絶好の攻撃チャンスなのだが、ギンガは完全にそのタイミングを逃していた。

というのも、ギンガの位置からはカオンの表情が見える。自分を助けてくれた時とはまるで別人のそれが、ギンガを金縛りにあわせただかのように自由を奪っていた。

嫌な汗が背中を伝い、手足が微かに震えている。ハツとして自分が感じたのは何か、と思考を巡らせる。それは恐怖。

そんな馬鹿な。あの人は自分と同じように管理局に属する、いわば仲間。なのにそんな人に恐怖を感じるなんておかしい。そう否定するが、やはり自分が今感じているのは恐怖以外のなにものでもなかった。

ヤヨイは怒り心頭だった。バカ呼ばわりされたこともそうだが、何よりたとえ一瞬でもカオンが向けてくる視線に気後れしてしまった自分に怒りが沸々と沸いて来る様子が分かった。

「バツ　　いいですわ。わたくしをバカ呼ばわりしたこと、わたくしにそのような視線を向けた事を後悔させて差し上げますわっ！」

ヤヨイがトンボキリを力任せに振り切った。押されたカオンはそれに逆らわずに後ろへ跳んで威力を殺した。

そこへ間髪いれずヤヨイが打つて出る。

「喰らいなさい！不如帰！」

魔力を乗せ、殺傷力を上げた強力な突き。ギンガにも使用してトライシールドごと吹き飛ばした攻撃。

物凄い速さでカオンの首元へと繰り出されたそれを、体勢を沈みこませることで避け切った。同時にそれは、カオンが得意とする居合いの体勢に入っている事を意味している。

「斬り裂け、絶凍氷神　　っ!？」

鞘から抜き放たれる刃が火花を散らし、神速の速さでヤヨイへと伸びていく　　はずだった。刃はヤヨイには届かず、そころかカオンは右へ跳んで距離を取ったではないか。

見れば今の今までカオンが居た場所にはトンボキリの刃が戻って来ていた。あのまま居合いを撃ち込んでいれば決まっていただろう。しかし同時にカオンも致命傷を受ける事になるのは免れない。となれば避けるしかなかったのである。

おそらくは最初からこうなることを予想し、突きを出し切らなかつたのであろう。

カオンに思考する時間を与えず、即座に肉迫して尚も突きを繰り出す。

「闇演舞・不如帰！」

「っ、これはっ!？」

確かに繰り出されたのは突きなのだが、先程までとは全く違っている。真っ直ぐに伸びてくる一撃とは違い、突かれては戻し、突かれては戻しを繰り返す、所謂乱れ突きだった。

連続で出せる事に少しの驚きはあった。しかし、カオンには返ってその方が好都合だった。

即座に居合いの体勢に入り、トンボキリがその身に届く寸前、神速の居合いが放たれる。放たれる剣閃はトンボキリの先端の三日月

状の刃を正確に捉え、弾き返す。 が、乱れ突き故弾かれようとも再びカオンへと迫る。

だがその時既に、ムラクモは鞘に納まっていた。

「なっ!？」

今度はヤヨイが驚く番だ。つい今し方居合いは確かに放たれた。だが今、目の前には確かにムラクモが鞘に納まり、再び火花を散らして神速の居合いが放たれる。

お互い連続での居合いと突きを繰り返し出し合い、ほんの数秒間で何十撃と打ち合った。だが打ち合う度に、刃と刃がぶつかり合う場所がヤヨイに近付いていく。

そして、とうとうヤヨイの身体のすぐ傍でぶつかりあった剣戟は彼女の腕ごと弾き、トンボキリは後方の地面へと突き刺さった。

「そ、そんな……。ありえませんかっ!？このわたくしが」

押し負けた怒りを露わにするヤヨイの喉元にムラクモが突き付けられる。

刃を向けるカオンは押し勝ったというのに、それが然も当然とばかりに表情一つ変えず、冷酷な瞳でヤヨイを見下している。

「絶凍連刃閃。れんしんせん 連撃で私に勝負を挑むなんて、いい度胸ね」

「くっ……」

「さあ、私の質問に答えなさい」

「わたくしが答えるともお思いですか?」

「ええ、思っているわ。少しずつ身体を切り刻んでいく拷問はどうかしら?それとも薬物の方がいいかしら?ああ、性奴隷もいいかもしれないわ。あなたみたいな高飛車女を調教するのが好きな人って意外といるのよ?」

カオンの口からは常識では到底出て来ない様な言葉がポンポン出てくる。どんな手段を用いても口を割らせようとする彼女に、さすがのヤヨイも精神的に追い詰められていく。

ヤヨイも理解していた。目の前に居る冷酷な表情を浮かべている女は、自分が口を割るまで間違いなく今言ったことを実行するだろう、と。

しかし同時に分からなかった。何故ここまで自分たちに執着しているのか。もしや『あの方』の正体に気付いているのか？ そう考えもしたが、ありえない。

自分たちですらほんの数回顔を見たことがあるだけだ。普段、薄暗い塔の上で話す事はあるが、その時は顔が見えない。だから会うことも話す事もないカオンが知っている筈が無いのだ。

だからヤヨイは気圧されながらも敢えて強気に出た。

「あ、あなたが何を知りたいのかは知りませんが、わたくしを拷問したところであなたが知りたい情報を得られないかもしれませんよ？」

「ええ、そんな事は百も承知よ。けれどそんな事は問題では無いわ。可能性はゼロでは無いのよ」

ダメだ。という結論が即座に弾き出された。この女は小さな事は拘っていない。

このままでは想像も出来ない様な苦痛を味わわれ、得体の知れない薬物を打たれ、本当に性奴隷にされかねない。

それでは自分の、自分と兄の目的を果たす事が出来なくなってしまつのは目に見えている。

しかし管理局員がそのようなことを行ってもいいのか、と言われれば即答できない。それはヤヨイのこれまで歩いて来た道が理由として挙げられるのだが。

「社員がそのようなことをしてもいいはずが」
「心配は要らないわ。それくらいヒメガミの権力でどうとでもなるわ」
「くっ」

もう本当にダメですわ。すみません、お兄様。
ヤヨイは心の中で、兄に謝罪していた。共に目的を果たせなくなってしまうことに対して。

「妹が世話になったな」
「っ!？」

突然、男性の声が聞こえた。反射的にそちらへ顔を向けると、物凄い勢いでトンボキリが飛んで来ていた。

ヤヨイに突き付けていたムラクモで弾き飛ばすと、既に此方へと駆けていた男が弾かれたそれを手に取り、振り下ろしてきた。

ムラクモで受け止めるも弾かれたカオンはヤヨイとの間に十数メートルもの距離が出来てしまう。

この時点で既にヤヨイの事は半ば諦め、男を見る。

ヤヨイを妹と言ったのは間違いではないらしく、彼女と同じ黒髪に黒い瞳をした長身で端正な顔立ちをした美青年だった。

全体に目を模した模様が施された黒一色の袈裟の様なデザインは、おそらくバリアジャケットであろう。

「お、お兄様！」
「大丈夫か？」

「はい……。お兄様、申し訳ありません。それと、お助けいただき、ありがとうございますわ」

「気にするな。それより戻るぞ」

「ですが、わたくしたち二人で掛ければあの女も
「アレの場所が判明した。そちらを優先する」
「っ、分かりましたわ」

青年はカオンの事など一切目もくれず、ヤヨイと話している。
カオンはそれが少し気に食わなかったが、一切表に出さず、声を荒げる事もせず、ただ静かに問う。

「誰？」

「この場は引かせてもらう。お前よりも優先すべき事項があるから
な」

「待ちなさ」

カオンの問いかけにも答えずにサイトは言う事だけ言つと、20センチメートル程の紙切れを取り出す。それが黒い光を発すると、彼らの足元に魔法陣が展開する。

それが何かすぐに理解したカオンは神足で一気に距離を詰めて斬りかかった。

が、その瞬間には既に彼らの姿は無かった。消える寸前にカオンが見たその青年の目は、今の自分と同じ冷酷さを宿したそれだった。

「逃げられたわね。それより……。あなたは何時まで隠れているのかしら？」

隊舎の壁に空いた穴を見て、カオンが投げ掛けた。

ドキッ！ そんな音が聞こえてきそうなほど、ギンガはビツクリしていた。気付かれていたとは全く思っていなかったようだ。出ていくしかないと思ったギンガは大人しく姿を現した。

「す、すみません。その、奇襲にでもなればと思ひまして……」

言い訳に等しいような理由を述べながらカオンの目を見てみると、先程までの冷たさ、冷酷さ、残忍さは消え失せ、ここに現れた時の様にごくごく普通の目をしていた。

「結局しなかつたみたいだけど？」

「そ、それは……。すみません」

「まあいいわ。それで、私とあの子の会話は聞こえていたかしら？」

「いえ、何を話していたかまでは。あの、どういった会話を」

内容が気になったギンガは聞いてみようと思つて口を開いたが、『カオンちゃん〜ん!』という凄く聞き覚えのある声に遮られてしまった。どうやら声は上から聞こえてきたようで、美しい夕焼けに紫色が混じり始めた空には白いバリアジャケットを身に纏った、茶髪の女性性が降りてくるのが見えた。

「遅いわよ、なのは」

「これでも教導を途中で切り上げて急いで来たんだから」

まあいいわ、と仲の良さを伺わせるような会話をする二人を、ギンガはただポカンと見つめていた。

そこには『なのはさんってヒメガミ准将と知り合いだったんですか!?!』という、驚きの色が少し含まれていた。

第肆話 「冷酷な目」(後書き)

超お久しぶりです。

ほんとすみません。第参話を投稿してしまい、一度書く気が落ちてしまい……

それ以来どうにも書く気になれずに放置していました。

ですが最近少し書く気が戻り、第肆話を投稿するに至りました。

カオンのイメージが崩れたかもしれませんが、もともとそういう設定です。

詳しくは人物紹介ページで。

活動報告で一度同じ事をやりましたが、それだと答えられる人が限られると思い、もう一度行わせていただきます。

この作品、今後も更新を望めますか？

ぜひご意見をお聞かせ下さい。

尚、オリキャラは随時募集していますので、よければどうぞ。

名前 出来れば日本人っぽいカツコイイ&可愛い名前で(ただし女
オリ主のようにカタカナ表記)

性別・性格・年齢・デバイス・体格 e t c . . . キャラの特徴
後、使用する技名や魔法名も考えていただけると助かります。

注) 敵側として出す点に留意。

基本的に先着順で採用させていただきますが、設定があわなかったりする場合は不採用や、改変の可能性もあります。

また、予定よりも多く集まった場合は作者の独断と偏見で選ばせて

いただきます。

第五話 「ガグツチ」

次元世界。無限とも言える程に広く、その果てはどこに在るのか今だ分からない。数年に一度というゆっくりとしたペースではあるが、新たな世界が見つかったという事から、次元世界は膨張を続けているのかも知れない。

もしそうであったとすれば、果たして人は世界の果てという場所に辿りつく事は出来るのだろうか。

辿りつけるかどうかはともかくとして、これだけ広い世界なのに人が立ち入るべきではない場所というものが存在していてもおかしくは無い。

そしてそれは、一切公にはされていないが、現実に存在しているそれが。

第7 隔離世界 イザナミ

ここは、管理局によって世界から弾き出された世界。弾き出されたというのは、何も次元世界から弾き出されたという訳ではないし、そんなことは出来ない。もっとも、文明が発達しすぎて滅びてしまった世界の事を指して弾き出されたと表現するのであれば、あなたが間違ってもいないのであろうが。

とにかくこの世界、イザナミはあくまで管理局によって人の世界から弾き出されているという認識を持っていただきたい。

その理由はただ一つ。イザナミは人が住めるような世界では無いのである。いや、そう言ってしまうと見解の相違というものが起きってしまうだろうか。

この世界には、人が生きていく上で必要な物は何一つとして欠けずに存在している。酸素を含んだ大気や水、日の光といったもの全

てが。むしろ欠けていないどころか人が存在していない分、環境汚染などが無く、そう言った面を見ればこの上ないほどに潤っている世界だ。

そのせいなのか、この世界にいる魔生物は他の世界の追隨を許さないほどに能力が高く、また知能も高い。並みの魔導師では彼らと対等に戦うことはおろか、おそらくは何も出来ずに一撃で決着がついてしまうことだろう。

そんな魔生物が一匹や二匹ではなく、普通に存在しているのだ。ただ、一種類の魔生物だけが存在している訳では無く、何十、何百、いや何千種類もの魔生物がいるかもしれない。

かもしれないというのは、管理局ですら彼らには手を焼いている。EーS級魔導師が出撃して初めて戦える程の相手だ。しかも、こちらから何もしなければ向こうが何をして来るわけでもない。故に調査が進むことも無く、危険な世界として隔離世界指定されており、現在では何人たりとも近付かない世界となっている。

さて、そんな世界であるが今この時、イザナミには複数の人影があった。隔離世界という事を知らずに入って来てしまったのか、それともそれを知っても尚この世界に来ているのか。

結論からして、前者である可能性はほぼ皆無と言っていいたい。何故ならば管理局が通常的手段では決して辿りつけないように外から常時結界を張っているからだ。故に、この世界に直接流れ着く次元漂流者でもない限りはありえない。

そうすると、やはり可能性として高いのは何らかの手段を用いてこの世界に来たというものだろう。

複数の訪問者であるが、一人は燃え上がる紅蓮の焰を思わせる長く紅い髪をポニーテールにし、侍を思わせる腕の甲冑、ワンピース型のバリアジャケットを装備した女性　ミュ・カンザキ。

一人は長く艶やかな黒髪に少々釣り目になった吸い込まれそうな程漆黒に染まった瞳。黒一色で下半身部分がスカートアーマーになっているボディスーツ型のバリアジャケットを装備した少女

ヤヨイ・クロハネ。

一人は短めの艶やかな黒髪に少々釣り目がちの漆黒の瞳。端正な顔つきをしており、全体に赤い目を模した模様が施された黒一色の袈裟の様なバリアジャケットを装備したヤヨイの兄である男性

サイト・クロハネ。

そしてもう一人、ライトブラウンのセミロングの髪に翠の瞳で猫の様な印象を与え、顔は隠していないが第97管理外世界にある極東の島国の忍び装束を思わせる黒いバリアジャケットを装備した少女 ナオ・プリウス。

この四人が今、この世界の訪問者である。ミュとヤヨイの二人は以前に六課や陸士105部隊を襲撃した際と同じく、二メートル近い長さを誇る日本刀型アームドデバイス・アオエと、先端の刃が三日月の様な形状をしている槍型アームドデバイス・トンボキリを装備している。

初めて戦闘状態に入っているナオのデバイスも確認できる。彼女のデバイスはその両の手に装備している鉤爪型のアームドデバイスの様だ。名称はオニヅメという。

その三人に対して、サイトはバリアジャケットこそ装備しているものの、デバイスらしきものを装備しているようには見えない。おそらく、本当に起動していないのだろう。

さて、そんな彼らの前には今、巨大な魔生物が存在している。全長五十メートルはあるであろうその巨体は雪の様に白い。そして、その魔生物を一言で言うならば龍だろう。胴から生えている腕の先には鉤爪があり、頭頂部から尾にかけては体毛の代わりに紅蓮の炎が燃え盛っている。

この世界でも間違いなく、食物連鎖の上位に位置する存在と見ても間違いは無いだろう。

「これですか、ターゲットは」

「これがこの世界の頂点に君臨する、神にも等しい魔生物……カグツチですね、お兄様？」

「ああ、白い体躯に体毛の様な炎。間違いないだろう」

「そんな情報どうでいいっしょ？ 結局殺るんだからさ」

「ナオ、そう言うな。戦う相手の情報を知っていても損は無い」

「わーかってるって」

今にも戦いが始まるうとしているのに、彼らは呑気に話をしている。そして目の前にいる炎をその身に纏う白龍は、彼らが話し終えるのを待つほど優しくは無い。自分の世界に入り込んだ異物を排除するためであれば、そこには一切の容赦などありはしない。

カグツチは目の前の異物を排除すべく、雄叫びをあげながら一か所にいる四人目掛けて物凄い勢いで突進してくる。

しかし彼らにとってその程度の攻撃は大したものではない。散開して空へと上がり、容易に回避する。

「喰らいなさい、これでも。隼落とし！」

「わたくしが殺りますわ。 不如帰！」

カグツチが再度四人を補足するために速度を落とし、振り向いたところへミユとヤヨイが一気に接近していく。カグツチとの擦れ違いざまにミユが高速の居合いを、ヤヨイが鋭い突きを同時に浴びせた。

二人の攻撃はカグツチの長い首に叩き込まれ、それを容易く切断する。

「この程度ですか」

「呆気ないですわね。まあわたくし一人でも十分」

余裕の態度を見せながら振り向いた二人の顔は一瞬で驚愕のそれへと変化する。そこには、ダメージ一つ無いカグツチがいるのだ。しかも、先程よりもさらに怒っているように見える。

「どうしてですか？ 確かにさっき」

「どうやら通じないようですね、物理攻撃は」

すぐに冷静さを取り戻した二人が今の攻撃について分析していると、今度はナオが攻撃を仕掛ける。

彼女の右腕には肩辺りを起点にして覆いかぶさるように、自身の

デバイスであるオニツメを模したかのような鋭い鉤爪が五つ存在している。しかもその大きさときたら、彼女の身長の倍近い長さを誇っている。

そして、それを叩きつけるかのようにカグツチを斬り裂く。

「彩殺り演目・暗殺神刃！」
アサシンダガー

大きな鉤爪は左の二の腕辺りを傷付ける。今度は確かにダメージが残っているのか、身体からは僅かにだが炎が噴き出している。これには攻撃した本人も驚き、おお！ となっていた。

しかし噴き出した炎はすぐに収まり、元の状態へと戻ってしまった。

「どうやら純粹魔力ダメージでなければダメージは無いようだな。

しかもダメージを与えても高速回復するのか」

「どうするのですか？ サイト」

「どうもこうも、回復よりも早く純粹魔力ダメージを与えて倒すしかないだろう」

「それはそうだけどさ……」

サイトの提案にナオは乗り気では無いようだ。理由は至って単純である。この四人の中で高威力且つ純粹魔力攻撃を可能としているのは彼女のみなのである。

他の面々はデバイスに魔力を乗せての物理攻撃故、はっきり言って役に立たない。

「ナオさん、お兄様の指示ですよ？ 素直に従っていただけます事？」

「え、でもさあ、サイトがアレ使えばすぐつしょ？」

「お兄様に無理などさせられませんわ！」

「ナオ、カグツチがどこまで此方の攻撃に耐えられるか分からない現状でアレを使うのは得策ではない」

「よさそうですよ、諦めた方が」

「はあ……。結局あたしが一人でやんなきゃいけないのか」

ため息を吐きながらも、ナオが暗殺神刃を再度出現させて攻撃を

行おうとしたときだった。カグツチの喉元が光りながら膨らんでいき、それは徐々に上へと上がっていく。

四人は警戒を強め、ナオも攻撃を取りやめて様子を伺っている。と、カグツチが突然口を開いたかと思うと、同時に光が放たれた。

それはただの光では無く、内側が激しく燃え盛っている寶石のような球体。物凄いスピードで弾き出されたその射線にはナオがいる。

「げっ、やっぱあ！」

球体の正体は超高密度に圧縮された火炎魔力弾。普通の人間がそれを喰らえば、間違いなく跡形も残らない。消し炭すら残らず、完全に蒸発してしまうだろう。

それほどの代物だ。いくら魔法が使えるようともタダで済むはずは無い。きつと五体満足で生きていたら運は最高に良いだろう。そう思わせるほどのものだ。

最早避ける時間も無いナオは暗殺神刃を消し、バリアを展開する事に全力を注ぎ込む。だがそれでも耐えられるかどうか怪しい。

迫り来る火炎魔力弾にナオは苦渋の表情を浮かべる。死をも覚悟したナオの前に、火炎魔力弾の到達よりも早くサイトが立つ。そして右手を前へと突き出した。

火炎魔力弾がサイトに到達した瞬間、炸裂して二人は消し飛んだとカグツチは思ったことだろう。高い知能を持っているのだから、そう思っただけでも何ら不思議ではない。

それはさておき、消し飛んだものは全くの逆だった。サイトもナオも依然としてその場に存在している。彼らの代わりに火炎魔力弾が掻き消えたのである。

「あ、あり、かと……」

「はあ、はあ……礼はいい。ナオ、やれ」

「う、うん。分かった」

ナオは驚きを見せつつも、今度は素直にサイトの指示に従う。カグツチは何が起きたのか分かっていない様子で、向かってくるナオ

に反応が遅れていた。

そんな様子をサイトが呼吸を荒げながら見ていると、ミュとヤヨイが近付いて来る。

「お兄様、大丈夫ですよ?」

「ああ、問題ない」

「サイト、何ですか? 今のは」

「俺の能力だ。そんな事より、お前達はナオに加勢してやれ。カグツチの行動の妨害程度にはなるだろう」

「分かりましたわ」

「仕方ありませんね」

ナオの加勢に向かう二人を、サイトは今だ荒い呼吸のまま見送るのだった。

ミッドチルダ ヤヨイ・クロハネの襲撃後

ヤヨイ・クロハネは彼女を助けに現れた黒髪的美青年と共に去った。彼らの行動には謎が多い。六課を襲撃したかと思えば、今度は全く関係の無い陸士105部隊。一体何が目的なのか。現状では分からないとしか言いようがなかった。

事後報告を済ませたカオンは、105部隊隊舎の医務室を訪れていた。ヤヨイと交戦した局員の中で唯一軽傷で済んだギンガに、色々話を聴くために。

カオンが医務室に入ると、彼女の姿を認めたギンガは驚きの表情を浮かべていた。おそらく、カオンが来るとは思っていなかったのだろう。

そのギンガは一応ベッドに入ってはいるが、身体を起こしている辺りそれほど大したことも無いのである。一応お見舞いの品よ、と買って来た栄養ドリンクを手渡しながらベッドの傍にあった椅子に腰かける。自分よりも遥かに高い地位にいるカオンにそんなこと

をさせたからなのだろう、ギンガが小さく見える気がする。

「具合の方はどうかしら？ ええっと……」

「ギンガ・ナカジマ陸曹です！」

「そう。それでナカジマ陸曹、あの黒い娘から何か得た情報はあるかしら？ 話ができるの、あなたしかいないのよ」

「あ、えっと、私もお役にたてるような情報は……。せいぜい彼女の名前がヤヨイ・クロハネだっということくらいですね」

「ヤヨイ・クロハネ……」

彼女の名前を呟きながら、カオンは口元に手を当てて何やら考え込む仕草を見せる。邪魔をしてはいけないと思っただのか、ギンガは先程カオンから受け取った栄養ドリンクに静かに口を付けていた。

ふうっ、と息を吐いたカオンに、ギンガは考え込んでいたのが終わったのかな？ と判断した。のだが、ギンガは居心地が悪くなったのを感じた。よくよく考えてみれば、以前からカオンの事は知っていたものの今までは雲の上の人であったため、実際に会うのは今日が初めてなのである。

しかも今、この狭い医務室に二人つきりという、どうすればいいのかわからない状況に置かれていた。どんな話題を振ればいいのか分からないし、上官故に失礼なことなど言えるはずも無く。ギンガの脳はフル回転して話題を探していた。

ギンガがそんな事になっているとも知らないカオンは、彼女が百面相していて面白いなと顔を見ている。その事が何か話題を振ってくるのを待つてるのかも、と余計にギンガを焦らせていた。

そして一向に話題が思いつかないギンガの口から出たのは、今言ってもあまり意味の無い内容だった。

「あの……後から現れた男の人がアレの場所が判明したとか言ってみましたけど、何の事なんでしょうかね」

「え？ ああ。……さあ、私にも分からないわ」

「で、ですよ……あはは」

ギンガが苦笑いしていると、ガタッと音を立ててカオンが立ちあ

がった。やばい！ 怒らせちゃったかも！ 動揺を表にこそ出して
いないが、心臓が今にも破裂しそうなほど大きな音でドクン、ドク
ンと鼓動しているのが分かる。

どうしようどうしようどうしよう、と過剰な心配をするギンガだ
ったが、それは杞憂に終わった。

「ごめんなさい、ちょっと用事を思い出したから行くわね」

「……え、あ、はい。わざわざこんな所まですみませんでした」

「いいのよ、別に」

それじゃ、とカオンは医務室を後にした。プシューっという音と
共にドアが閉まったあと、大きなため息を吐く。今までのどの訓練
よりも疲れた気がした。

特にすることがあるわけでもなく、暇になってしまったギンガは
今日の戦闘を思い出していた。戦闘中、ヤヨイと相対するカオンは
さつきとはまるで別人のようで、どっちが本当のカオンなのだろうか
？ という思考の海に入っていた。

第7 隔離世界 イザナミ

ここでは現在もカグツチとの戦闘が継続していた。純粹魔力攻撃
でなければダメージを与えられないそれに、四人は予期せぬ苦戦を
強いられていた。

言っておくが通常の魔力弾程度のダメージでは瞬時に回復され、
無駄に魔力を消耗するだけに終わる。高威力の攻撃によって初めて
ダメージを残せるのだ。そのことが判明してからナオが孤軍奮闘し
ているのだが、やはりこの世界の頂点に君臨する魔生物だけあり、
いくら彼女の能力が高かろうが苦戦は必至だった。それは体力が回
復して呼吸が落ち着いたサイトが加勢に入っても同じことだった。

それにしてもこのカグツチ、一匹ですつと四人を相手にしている
というのに全く疲労というものを見せない。最初のころから速さも、

攻撃の質も落ちていないのだ。

「はあ、はあ　四人がかりでもキツイですわ」

「これが一端、という訳、ですか、神の力の」

「ちっ、こんなことなら他の奴らも連れてくるべきだったか」

「ねえ　ぜえ、ぜえ　もう、無理っぽくない？　場所は、

分かってるんだし、出直した方が　」

カグツチが飛ばして来る大量の小型火炎魔力弾を回避しつつ、ナオが撤退を提案しかけた時、彼らのすぐ近くに魔法陣が出現した。

何事だ？　と思つたのも束の間、それは転送魔法によるものらしく、そこには人影が生まれていく。

「遅いと思つて来てみれば、あなたたち、まだ戦っていたの……」

現れた人物は呆れた口調で呟く。声色と身体つきからして間違はなく女性である彼女は、腰まで届く美しい紺色の髪に蒼い瞳をして、巫女装束を模した黒いバリアジャケットにブーツを履いている。

それは誰が見てもカオン・ヒメガミに他ならなかった。唯一バリアジャケットの色が違うという点があげられるが、そんなものは魔力で作り出した防護服に過ぎない。色などいくらでも変えられる。

「申し訳ありません。アレが奴の能力を大幅に上昇させているようで、思わぬ苦戦を」

「……まあいいわ。少し離れていなさい」

「分かりました。お前ら、距離を取れ！」

ミュたちはサイトの指示に従い、カグツチから距離を取る。離れていく彼女達を前にして、カグツチは誰を最初に狙おうかと考えているのか、その場で動きを止めている。

「勝手に動きを止めてくれるなんて」

好都合だわ、と彼女。スツと右手を前に出して一言。

「凍てつけ、凍る世界」

それと同時に魔力を凍結変換させ、カグツチの周囲に冷気が渦の様に発生したかと思うと付近の物を巻き込んで一瞬のうちに凍結させてしまう。炎の力を持っているカグツチだが、その炎ですら凍ら

せてしまっていて、溶け出す様子は一切無い。

「ナオ」

「は、はい！」

「凍っている今なら氷ごとカグツチの身体を砕けるわ」

「わ、分かりました。彩殺り演目」

オニヅメの先端からは、目に見えるか見えなにかというくらい細い魔力糸が何本も伸び行く。ナオはまるで踊っているかのように腕を振りまわし巧み糸を操り、それらが氷漬けになっているカグツチに絡みついていく。

そして、バツと勢い良く両腕を左右に広げる。

「賽さいの舞！」

すると絡みついていた魔力糸が一気に引き絞られ、カグツチを氷ごと細かく切り裂いていく。細かくと言っても、元の大きさが大きさが故に、人間からすれば十分に大きいのだが。

ともかくいくつにも切断されたカグツチの身体の内、胸の辺りに当たる部分にカオンとしか思えない彼女が近付いていく。胸の中心辺りに来た彼女はカグツチを凍らせている氷に触れると。

「砕けよ、終わる世界」

その一言と共に、完全に凍っているカグツチの身体は砕け散る。

さらに歩みを進める彼女の先には、砕けた破片の中に勾玉のような形をした手のひらサイズの白い物体がある。それを見つけた彼女の口元には笑みが浮かぶ。

そこまで歩み寄って拾い上げると、サイトたちに撤退の指示を飛ばし、五人の姿はこの世界から消えた。

隔離世界故、この世界でこんなことが起きていることを管理局が知ることは無かった。

第五話 「ガグツチ」 (後書き)

今回は敵側メインですね。

さて、途中から現れた『カオン』ですが、果たして

。

オリキャラ募集します

以下、詳しい内容となっています。

名前 出来れば日本人っぽいカッコイイ&可愛い名前で（ただし女
オリ主のようにカタカナ表記）

無理にそうする必要は無いです。

性別・性格・年齢・デバイス・バリアジャケット・体格 e t c . . .
キャラの特徴

後、使用する技名や魔法名も2、3個〴〵考えていただけると助かります。

変に希少技能などを持たせる必要はありません。

注)

主に敵側のキャラとして登場させるつもりでいますので、それを踏
まえてお考えいただけるとありがたいです。

また、予定よりも多く集まったりした場合は作者の独断と偏見で選
ばせていただきます。

何か分からない事があれば感想なり、メッセージなりで聴いてくだ
さい。

募集終了と同時にこのページを削除します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950k/>

魔法神姫リリカルなのは

2011年11月11日11時05分発行